

Chapter1 「Death」

こんにちは わたくしと来ませんか
そういったあの子は向こうへいったきり、帰っては来ませんでした。

わたしは箱の奥に詰められて
遠い遠い場所まで流れて運ばれたのです。

わたしの周りを綺麗な顔が囲んでいます。
目の細い整った髪的女性が遠くを指差して言いました。

「なんて素晴らしいのでしょうか。私たちもゆきましょう。」

橋の上にはきらきら光る灯火が見えました。
随分と遠く見えて、近くにあるような、そんな気がしたのです。

夜になると、
顔の穴から大きな包丁を振りまくひと、
目や耳が取れたりひっついたりするひと、
足にたくさんのガラス玉を引きずるひと、
いろんなひとが列になって歩くのです。

「あなたも来なさいよ。一緒に踊りましょう。」

身震いするような寒さが喉をさしたように思いました。
前から賑やかな太鼓や笛が鳴っています。
みんなは揃えた衣装を着て、踊り始めました。

震える手を右に、震えるあしを前に、靴擦れができるまで踊りました。

朝になると、跡形もなくなっていました。
刃を振りまくひと、目や耳が取れるひと、ガラス玉を引きずるひと。

わたしの周りを綺麗な顔が囲んでいます。
目の細い整った髪的女性がわたしを指差して言いました。

「冗談でしょう。気がおかしくなったのだわ。」

空には大きな綿雲がぼっかり浮かんでいました。

わたしは箱の奥に詰められて
遠い遠い場所まで流れて運ばれたのです。

手に蠟燭を持って浜辺を歩いていきました。
踏みしめるように砂を歩き、波が足跡をさらいます。

ゆっくり日が沈み、じぶんとそらがわからなくなってゆくのです。
溶けて解けて融けていくうちに、あの橋にあった灯火のようなものが浮かびました。
目を閉じると、わたしは静かに息をほどこしました。

「そうか、全て分かってしまったのだ。」

Chapter2 「Stagnation」

わからないはずの君を待っている
歌うように、眠るように、もう残りもないけれど

通り道が遠り道
潰れた店に次の店が押し入る
伸びる影法師を誘う赤い垂れ幕
消えかかる白線

雨に声をかけて 揺れる木の葉は歌う
落ちて集まって離れて重くなる
どうかこのままで

夜の星屑をあつめる
手にいっぱいのおきらめた誰かのゆめ
ぼくが砂に埋めてあげるから

うつくしい海のそばで歌をうたいあげよう
一滴、一滴、長くつみあがるまで、ずっとずっと

わからないはずの君を待っている
歌うように、眠るように、もう残りもないけれど

これでもいいのなら
全部ゆるしてほしいよ

Chapter3 「Season」

❖ 冬

- 静寂と儚き露が方舟にかの背は遠く月は落ちたり

冬は寒くて、痛々しい。全ての葉は地に落ちて、枝だけが空を劈いている。清廉潔白だった雪がゆっくり落ちてくる。私は、抗う。清廉潔白なままのきみがほしいのだ。

- 降り落ちる雪のひとつを吾が手にと差し伸ばしても雨に変わりぬ
- 深として覆わぬ雪に刻む針結べど想ふ水辺の椿
- 雨粒を弾いて鳴らす傘ひとつ空いた手に刺す寒さこそすれ

なにものが次の春まで残るだろうか。ふく、ふく、と大きくなる蕾を静かに見つめていた。

- ぱつぱつといらぬ枝ごと切り落ちる残った芽のみ咲くを赦され
- 冷ややかに伝う蛇口の水脈を目を閉じて結う深淵の艶
- 梅薫る桜芽吹ひて春近く散りゆく時を切なく思ふ

❖ 春

- 春風と紅茶の香りあたゝかく零れぬやうに目を閉じてゐる

見事なまでに咲き誇る花々は我々を圧倒させる。時には邪な魔法をかけてしまう。それほどに魅力的であるのだ。たまには目を閉じて、香り高いお茶を含んでみる。何かが見えてくるような気がする。お茶は西洋でも東洋でもいい。それぞれを身体いっぱいに含んで愉しむのだ。春風と共に。

- ちらちらと桜を縫って惑わせた行方を知るか白鶴鴿よ
- 花房が零れしだれてさくらいろふんわりゆわり漂えるよう
- 揚々と翼をひろげ凜といふまばたきの間も花散る如し

驚く間に散っていく。散り際もなお一層美しく。今が一番と言い切る前に。何か勿体無い気がする。人生最期と決まった訳でもなかろうに。どうにもこうにもならず、刻は進む。どんな人にも次の章へと歩ませるのである。

- 桜越へつぎの色落つ世界へと色を渡して春夏秋冬めぐる

- 此花がふたたび薫る其の頃にこの瞳の奥の月は溺れる
- 望むまで蒼の涙を削りゆく心の臓から零れて消える

❖ 梅雨

- じんわりと染み込むような細い糸静かに降りる月の五月雨

わたしたちは取り残されていないだろうか。あの桃色舞う季節に。大丈夫だと言わんばかりに大きな紫陽花をかごいっぱい摘んでみたくなる。もちろん、雨の日に。

- 雨浸る重みを増した紫陽花が夏の香りを放ち始める
- 羽広げ飛ぶ練習をし始める空に発つ子よ強く嘶け
- 泣いていた青葉に宿る小声の子知らないままで過ぎる足元

大地の鼓動に圧倒されてしまった。それになりたいとすら思った。いつかわたしはひとつになる。この地に還るのだろう。

- 削ぐやうに鼓動の隅を撫でてみたつたわる壁は夜気をも孕む
- 迷いなく澄んだ大地を駆け巡る碧の流れに呑み込まれたい

❖ 夏

- 押し寄せるあをと流れた貝の花しゃらしゃら鳴いて磨かれてゆく

総天然色の青い風が呼んでいる。駆け抜けろ、茹だる熱風を越えて。

- 振り向いた笑顔の君は澄んでいるサイダー飴の真夏の香り
- 風鈴に馴染む気がする君の声紅い頬ならゆけるはずなの

毎日を迷宮のように過ごす。誇り高い終幕へと準備を進める。静かに自分を見つめている時間だけは失いたくないものである。

- 霧纏う船で漂う朝の海行ったり来たり静かにひとり
- わたくしのいのちはどこへむかうのかおわりをのぞむうつくしい死を

❖ 秋

- 赤緑揺れて離れて空に舞う染まり切らない君と私と

眼前に聳え立つ山は、フィナーレのように染まる。有色の葉が車、屋根、床に化粧を落とすようにぴったり貼りつく。これもこれで、模様、ということだ。

- 舞い込んで溶け込み揺れる床と窓連れてってよと言いたげな色
- 夕方の涼しい風が刺しているうずくまっている明日の不安を
- 一瞬の紅き葉の風散りゆくを風は冷たく月は悲しき

❖ 冬

- 雨降って紅葉落として貫くは全てを覆う真白の気配

色々な音がよく聴こえる。熱も一層増して、生きていることを主張する。まだ、この寒さは乗り切れると言いたそう。いや、忘れないでいて欲しいのかもしれない。慎重に掬い上げ、壊れないように包み込む。必ず芯は冷えないように過ごそう。暖かいあの*でも、湧き上がる大地の熱でも、なんでも借りていいのだから。

- 灰色の寒空被る冬の道一直線に振り切って白
- こつこつと刹那近づく凍る夜瞑ってしまうよ果ての月まで
- 息のおと柔らかな皮膚生きる熱離せばきつと震えてしまう
- 声さえも泡に追いやる夜の底あの日の月は幻のよう

❖ 「 」

- 空を飛ぶマンタの声が風になる光の群れを連ねて遠く

その気になれば飛べるのに、飛びたいというのは飛ぼうとしていないだけなのである。

- 何処までも山など知らず空を越へ我は自由を羽ばたかせるの
- 目を閉じて最期のように君を待つ囁る鳥と柔らかな朝

あの頃からどれくらい経ったのか。遠い昔の話のようで、つい昨日のことのよう。もう手向けの花はじゅうぶんでしょう。あなたの背には何が纏われていますか。

- 砂の上幽霊船の白昼夢大きな鯨一房の花

Chapter4 「Birth」

小さな拍動がひとつ、ふたつ
妙なる音が鳴り響く

君は深い
君は蒼い
私は月

藍色は明けの色
明けの色は藍色

十二の星を冠るひとよ
山を駆け、大海を潜り、空を切る
清らかなるものに言祝ぎを

大きな拍動がひとつ、ふたつ
妙なる音が鳴り響く

月が開く